

$$NW = \int_0^{nf} E(\text{real}^x \cdot \text{Arch}(y))$$

山本 直哉 (指導教員 八尾 廣)

1 はじめに

日頃、人は自分の身の周りの小さな世界に生きている。だが過去に短期間で日本を縦断し、その場その場で生きていく人々のリアルな日常を繰り返して見えていく中で、リアルな日常の連続的な積層こそが都市なのではないかと感じた。現在の都市は、ほとんどのものが平面的に広がっており、それではスクラップ&ビルドが繰り返される中でそこにあった日常は消えてしまう。だが将来的に水平や斜行エレベーターなどの技術が一般化した時、建築はさらに自由な形になり都市も立体的になることだろう。垂直に伸びる都市は朽ちたとしても一部が残り、そしてまた新しい部分が成長していくことになる。これは日常を建築と共に残したまま都市が更新されていくという事であり、よってこのイメージを超高層の建築で表現する。

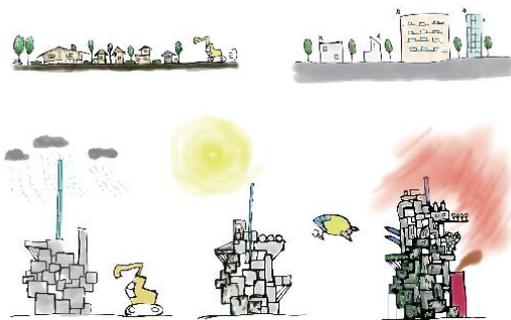


図1 コンセプトイメージ

2 敷地

計画地：東京都新宿区西新宿3丁目20-2

計画範囲：複合施設

敷地面積：43590㎡

容積率：217950㎡

建ぺい率：30513㎡

新宿は多様な人々が日々生活し、様々な顔や文化を持つ。商業の顔、業務の顔、住宅街の顔があり、あらゆる人種が行き来している。にもかかわらずお互いが干渉する事無く過ごしている。そんな人たちに今一度、都市を歩く楽しさ、日々の生活の営みを思い出しても

らいたいと思う。さらにこの敷地はこの3つの顔が混ざり合うポイントで、3丁目は今後再開発も予定されている。何よりもまず新宿が高層都市として日本で最初に発達していくと思い、この敷地を用いて高層都市を提案したい。



図2 敷地

3 エレベーター

エレベーターの最大の利点とはある地点同士を高速で移動出来るという事である。これにより移動時間を短縮し、効率をあげる。今回のプランはこのエレベーターに重点を置いて設計している。水平、垂直のエレベーターを組み合わせる事でループするエレベーターがつくれ、超高層の中に今まで無かったサイクルが生まれる。さらに今回のプランではこのエレベーターを都市でいう道や、電車、バスに置き換えて設計しているので通常の高層ビルに搭載されている物よりスピードを20キロメートルと遅く設定している。よって通常の高層ビルでは感じる事の出来ない移動している間の空間を体験する事になる。遅くした事による効率の低下はループ状にする事で解消している。エレベーターのサイズは5メートル角のボックスになっており、この中にはベンチやテーブルなど設けられておりそこで時間を過ごす事も可能となっている。そしてこれが様々な空間にそれぞれの場所の情報を運び、変化をもたらす。構成としては、このエレベーターに空間が組み付き形を整形するイメージで全体を構成する。これにより立体的な都市の様になり、エレベーターの移動

による空間体験は歩くのとも違う、従来のエレベーターとも違う物となる。これにより今までに無い都市性を感じるが、それはどこにでもある日常の積層である事に変わらない。

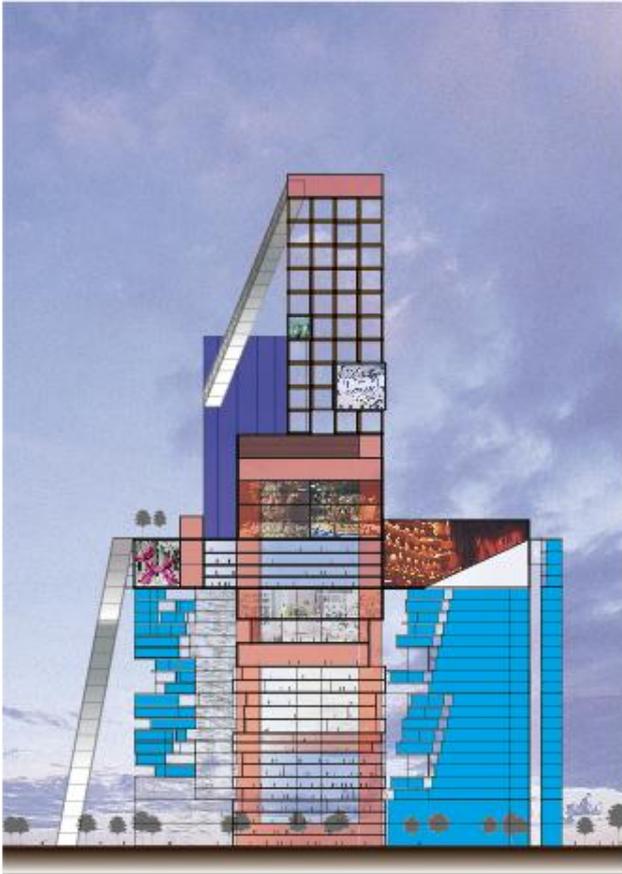


図3 断面図

4 プログラム

敷地に対しての必要面積を機能ごとに割り出し、最小面積にそれぞれを分割する。それらを実際の都市のようにオフィス街や高級住宅街などの個性を与え規模に準じて機能を7つの塔に振り分けた。それらをループするエレベーターで縦横に繋ぐ。その中に本来の機能である高速移動が可能な斜行エレベーターでGLのランドスケープと上空のランドスケープを結んでいる。これにより建物内を移動する際の動きが徒歩によって都市を散歩するような、電車を乗り継いで遠出するような感覚になる。これは立体的な都市そのものである。

